旧村川別荘だより

165号

令和３年４月２２日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

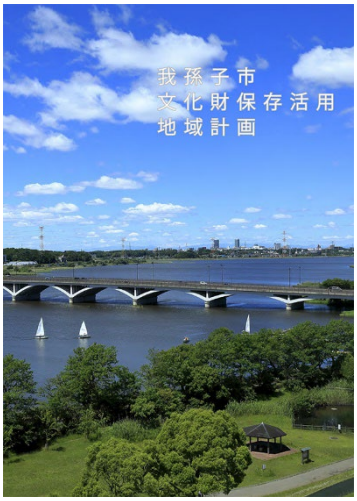
４月の月例会について

４月９日（金曜日）、緊急事態宣言が解除されましたので、久しぶりに月例会を開催しました。１月～３月は月例会を中止したため、久しぶりの開催となりました。想像以上の出席率で、みなさんの熱い想いを感じました。

我孫子市文化財保存活用地域計画について

今回の月例会では我孫子市文化財保存活用地域計画について、お話ししました。

我孫子市文化財保存活用地域計画とは？



平成30年の文化財保護法改正に伴い、新たに市町村による文化財保存活用地域計画の作成及び文化庁長官による認定が制度化されました。

法改正以前は、文化財の保存に重きを置いていましたが、改正により、文化財を次世代に継承するためにいかに保存し、活用していくかというように方向転換しました。

これにともない我孫子市では、令和元年度から我孫子市文化財保存活用地域計画の作成に着手し、昨年12月18日、文化庁から認定を受けました。現在までの認定数は全国で23件、我孫子市は銚子市と同時で千葉県で初の認定となりました。

今回の計画では

１．「我孫子遺産」をつくる

２．「ものがたり」をつくる

これらのことが、本計画の特色となっています。

「我孫子遺産」とは

文化財保護法で指す「文化財」とは、国によって指定・登録などされたものですが、その枠組み外でも我孫子の歴史や文化を語る上で「大切なもの」「価値のあるもの」を「我孫子遺産」と呼び、積極的に保存・活用していきます。

※文化財として指定するのに難しい、昔ばなしや風習、風景なども我孫子遺産に含まれます。

「ものがたり」とは

例えば、道しるべや祠など規模が小さい我孫子遺産を見学するためだけでは、なかなか足を運んでもらえません。そこで、我孫子ならではのテーマに合わせた「ものがたり」を作ることにより、我孫子遺産を繋ぎ、魅力アップを図りました。

以上のことは、お配りしている概要版にも記載していますので、あわせてご覧ください。

今回、地域計画を作成することによって、文化財の保存・活用における我孫子市の現状・課題を整理することができました。課題は以下のとおりです。

（１）市内文化財の調査・研究・指定にかかわる課題

（２）文化財の保存にかかわる課題

（３）文化財の活用にかかわる課題

（３）の中で、現状として「旧村川別荘ボランティアガイドのように我孫子遺産に関心のある市民もいるが、まだまだ認知度が低い」と分析しています。

そこで、今後の方針として、市民の関心を高めるため、ボランティアガイドの体制を整え拡充し、運用していくこととなりました。

まだ、計画段階ですが、今後ご相談する機会があるかもしれません。その際は、ご協力をお願いいたします！

地域計画は市ホームページでも公開しています。また、旧村川別荘をはじめ、市内の図書館・行政サービスセンター・近隣センターにも設置しますので、ご覧ください。

今年度の旧村川別荘市民ボランティアガイドの活動について

昨年は新型コロナウイルス感染予防のため、３月から月例会が中止となり、ガイドの活動もいったん休止しました。

季節が移り替わるにつれ、世の中も動きはじめたため、ガイド活動も動きはじめたいと思いつつ月例会を再開するも、度重なる緊急事態宣言などにより、ガイドの活動を見合わせていた結果、一年が経ちました。そこで、今年度の予定についてお知らせします。

（１）ガイド開始について

オリンピックや、近年の猛暑などを考慮し、９月からガイド活動を再開したいと思います！

再開にあたっては、密を避けるため、入館は５人程度を目安とします。スリッパの消毒などはシルバーさんにお願いする予定です。

シフトについては、以前は全ての開館日にどなたかをお願いしていましたが、今後しばらくは、ガイドを希望してくださる方のみ、ご希望の日時でお願いしたいと思います。事務局としては、結果的にガイドさん不在の日ができてしまうのは、しかたないことだと思っています。皆さまの負担がないかたちでお願いします。

シフトについては、７月のお知らせで８月の月例会のときに皆さまのご予定をお伺いして、９月からのシフトを作成する予定です。時機がきましたら、お知らせいたしますので、ご協力をお願い申し上げます。

（２）月例会について

９月のガイド活動が再開するまでの間、月例会は２か月に１度に変更します。場所は、ご不便をおかけいたしますが、密を避けるため、教育委員会大会議室で<u>偶数月</u>に行います。

（３）イベントについて

「竹灯籠の夕べ」と「ひなのまつり」については、しばらくの間、見合わせたいと思います。なにか企画があれば、お知らせください。

事務局より

緊急事態宣言が解除されたことで、４月の月例会を開催することができました。お越しいただき、ありがとうございました。

ただ、残念ながら３月の月例会開催を企画し、４月月例会も進めていた海老原が３月 31 日をもって手賀沼課へ移動することとなりました。海老原からのメッセージです。

「皆様には大変お世話になりました。２年間という短い間でしたが、いろいろと経験させていただき、ありがとうございました。昨年はコロナの関係で思うような活動ができず、とても残念でした。どうぞ皆様、これからも旧村川別荘をはじめ、我孫子市の文化財を愛していただきますようお願い致します。」

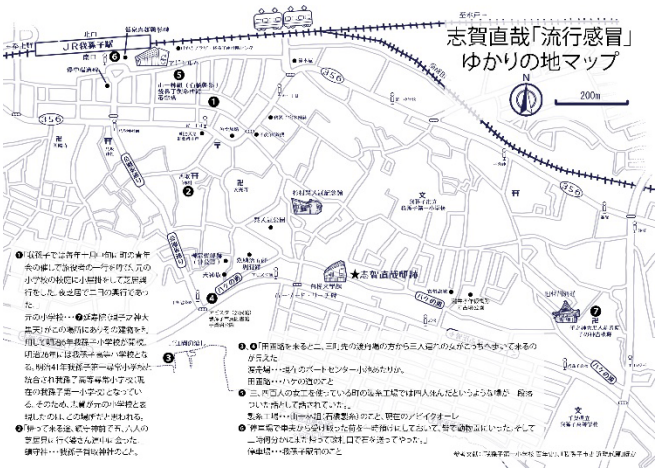
２年間のうちの１年が新型コロナウイルスによる対応となってしまい、皆さんとお会いする機会が少なかったことを残念がっていました。

海老原が異動となりましたが、今回、新規採用職員として柏瀬が新しく歴史文化財担当として、配属されました。手嶋と同じ考古学専門の職員です。ぜひ、お声がけください。よろしくお願い申し上げます。

次回の月例会は<u>６月１日（火）午前９時３０分から教育委員会大会議室で開催</u>します。

追伸：お知らせが遅くなりましたが、４月１０日（土曜日）BS プレミアムにて「流行感冒」が放映されました。タイミングよく月例会の前の日だったので、月例会ではお伝えできました。

番組放送を記念して、白樺文学館の稲村学芸員が志賀直哉「流行感冒」ゆかりの地マップを作りました。ぜひ、我孫子散策にご活用ください。



事務局より

今年度最後になる 3 月の月例会はぜひ開催したい、と準備を進めていましたが、緊急事態宣言が延長となってしまいました。皆様にお会いすることができず、事務局としてもとても残念です。４月の月例会では、今後の旧村川別荘について皆様からご意見を伺えれば、と考えています。社会情勢を見ながらにはなりますが、ぜひとも開催したいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

今年度は新型コロナウイルス感染症への対応に追われた 1 年でした。皆様にもご心配やご不安をお掛け致しました。来年も試行錯誤の 1 年になるかもしれませんが、どうぞご理解・ご協力くださいますようお願い致します。

旧村川別荘だより

166号

令和３年６月２３日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

６月の月例会について

６月１日（火）、我孫子市は緊急事態宣言の対象地域ではなかったので、予定どおり２カ月ぶりの月例会を教育委員会で開催しました。

月例会では、今後の月例会の日程、月例会開催の方針、９月のガイド再開に向けての流れをご説明した後、勉強会として白樺文学館学芸員の稲村さんに「白樺文学館のコレクションについて」を発表していただきました。

白樺文学館のコレクションについて

〇博物館の使命とは？

博物館は、資料を【収集、整理】、【保存】したものを【調査研究】した結果、【展示・活用】することで、【教育普及】活動をしていきます。

しかし、博物館といえども何もかも収集できるわけではなく、博物館ごとに収集目的・基本方針（コレクションポリシー）があり、博物館運営の主たる目的に合わせて資料を収集することになります。

〇白樺文学館の基本方針とは？

白樺文学館は、「我孫子市にゆかりのある白樺派の文人が遺した作品その他の資料（以下「文学館資料」という。）を収集し、及び広く市民に紹介するとともに、これら文化的財産を次世代に引き継ぎ、もって市民の文化的向上に寄与するために設置」されました。（我孫子市白樺文学館の設置及び管理に関する条例）

→我孫子の魅力を伝えるために、我孫子にゆかりのある白樺派の文人たちの作品や資料を収集、保存、活用する。

〇白樺文学館の歴史

平成 13（2001）年　白樺文学館開館（民営）
平成 21 年　寄贈を受け我孫子市白樺文学館開館

→我孫子市白樺文学館の設置及び管理に関する条例が定まることで、「白樺文学館が集めるべき資料」が定義されました。

〇白樺文学館のコレクションについて

それでは、白樺文学館のコレクションを博物館の使命と照らし合わせてみていきましょう。

【収集・整理】

①平成 13 年～平成 20 年の民営時代に収集された資料、約 430 点

白樺派関係資料：志賀直哉の原稿、柳宗悦の書、武者小路実篤の画賛など

民藝運動関係資料：バーナード・リーチ、河井寛次郎などの作品

→一つ一つの資料価値が高いため、他館からの貸し出し依頼が多い。

→まだ、白樺文学館が集めるべき資料の定義がなかった時代なので、テーマを決めて展示を行うことが難しい。

オーギュスト・ロダン「鼻のつぶれた男」

②平成 21 年～我孫子市白樺文学館開館してから収集された資料

（１）原田京平関係資料（約 500 点）

「白樺派ゆかりのある画家・歌人」として、収集。

→原田京平のご遺族から寄贈された資料である

ため、資料の背景、テーマに沿った資料群となっている（＝展示テーマを設定しやすい）。
→我孫子に住んでいたことがわかっており、当時の我孫子の様子がわかる資料である。
→原田京平という画家・歌人に対する認知度が低い。
→保存状態が悪い資料がほとんどであった。

（2）山田家コレクション（約 200 点）
志賀直哉五女田鶴子さんの嫁ぎ先である、山田家より寄贈を受ける。
→志賀直哉のご遺族から寄贈された資料であるため、資料の背景、テーマに沿った資料群となっている（＝展示テーマを設定しやすい）
→「我孫子在住」時代の作品ではない。

【保存・調査研究】
収集し、整理することで、資料の歴史的背景が見えてきます。また、展示を行うために調査研究することで、資料の価値を見極めるとともに、資料の状態を確認し、展示（公開）のために修復などの必要な処置を行うか検討することができます。

修復前

修復後

【展示・公開・活用】
修復したことにより新たにわかったことや、いままでの研究結果をもとに資料を展示します。原田京平など、まだ評価されていない人物や作品については、より丹念な調査・研究を行った上で、展示会の回数を重ねることが情報発信につながり、社会的な認知度が上がります。

〇まとめ
白樺文学館コレクションは我孫子市にゆかりのある白樺派の文人の作品を中心に、「我孫子市民にとって大切なもの」「次世代に引き継ぐもの」を収集しています。これは、前回お話しした、「我孫子市文化財保存活用地域計画」にもうたわれている「我孫子遺産」と言えるでしょう。
現在、白樺文学館では開館 20 周年を記念して、民営時代のコレクションを中心に展示しています。資料状態を保護するために、なかなか展示できない作品も展示していますので、ぜひ、お出かけください。

事務局より

次回の月例会は８月４日（水）午前９時 30 分から教育委員会大会議室で開催します。9月以降は、１カ月ごとに月例会を行います。今年度分月例会については、日程を決めました。詳細は別にお配りしている資料をご覧ください。
8月 4 日の月例会ではシフト表を回収し、その場でシフトを決めたいと考えていますので、「月例会の参加は難しいけれど、９月のガイドは入りたい！」という方は、メールか FAX にてお知らせください。また、ご都合の良い日に〇をつけていただきますが、ご希望の上限日数などもあれば併せてお知らせください。
いよいよ旧村川別荘市民ガイド再開に向けて、進んでいきたいと思いますが、まだまだ、心配な状況でもありますので、皆さまのお気持ちとご相談しながら、無理なく再開できたらと思っています。なにかご不明な点、ご不安な点などございましたら、お気軽に事務局までお知らせください。よろしくお願い申し上げます。

旧村川別荘だより

167号

令和３年８月27日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

8月・9月の月例会について

月例会開催予定の8月4日(水)、9月3日(金)、我孫子市は緊急事態宣言の対象地域となってしまったので、月例会は中止となりました。楽しみにしてくださっていたガイドの皆さま申し訳ありませんでした。特に8月の月例会は緊急事態宣言直後となっており、急なご連絡になってしまいました。

9月の月例会では、杉村楚人冠記念館学芸員の高木さんに今回開催している展示解説をお願いしていました。開催中止となってしまいましたが、高木さんが皆さまに月例会でお配りするはずだった資料を同封していますので、ぜひ、ご覧いただければと思います。

杉村楚人冠記念館夏の展示について

〇企画展「弱者へのまなざし　幸徳秋水・堺利彦・杉村楚人冠の交流」

現在、杉村楚人冠記念館では、大逆事件 110 周年に合わせた企画展、「弱者へのまなざし　幸徳秋水・堺利彦・杉村楚人冠の交流」を開催しています（10 月 10 日［日曜日］まで）。

大逆事件で処刑された幸徳秋水、幸徳死後の社会主義者を支えた盟友堺利彦の書簡のほか、幸徳の無実を訴える針文字書簡、判決の日を回想する石川啄木の書簡などを展示しています。

この３人は、明治に活躍したジャーナリストです。（楚人冠は明治から昭和ですが、この３人のなかには明治までしか活躍できなかった不遇の人物が含まれています）

□幸徳秋水とは？

『自由新聞』『万朝報』『平民新聞』の記者

□堺利彦とは？

『万朝報』『平民新聞』の記者

□幸徳と楚人冠との出会い

明治３２（1899）年、社会主義研究会に参加した際に出会う。

〇３人の絆

①トルストイの「日露戦争論」

楚人冠が『東京朝日新聞』の外国紙担当であったからこそ手に入れた最新記事を『平民新聞』の記者であった幸徳・堺に譲る。

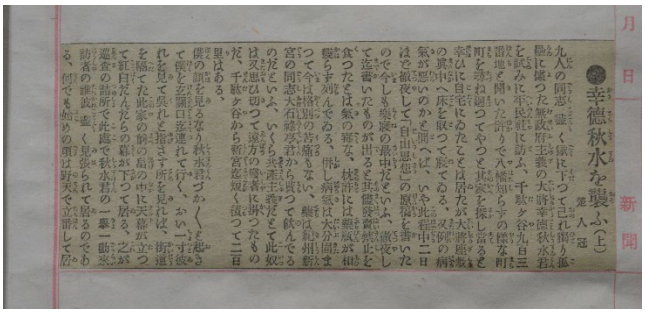
→楚人冠はスクープの独占を放棄してでも二人を支援した、強い友情の証。

●トルストイ伯日露戰爭論（一）

②幸徳への取材

幸徳が警察に２４時間監視されている状況にもかかわらず、楚人冠は彼を訪ね、その様子を記事にしてしまい、警察は面子のためか監視用のテントだけ撤去、監視は続ける。

→楚人冠は公に発言できる場を奪われた幸徳の言葉を取材記事として発表。


●幸徳秋水を襲ふ（上）

③幸徳からの最後の葉書

明治 43（1910）年には幸徳は弾圧を逃れるためと病気療養を兼ね湯河原温泉で執筆に専念する。ここから送った絵葉書が楚人冠への最後の通信に。

④堺の選挙出馬

堺利彦は議会から社会主義的な政策を実現していこうと市議会選挙、衆議院選挙に出馬している。しかし、選挙には資金が必要であり、その捻出に苦労していた。

→揮毫を売って資金を集める堺のため楚人冠は購入に応じた。⇒堺の活動を応援

右）堺利彦の書

幸徳秋水作の漢詩「獄中懐母」

楚人冠も幸徳も母子家庭に育っている。

〇展示をとおして

幸徳の目、堺の目、楚人冠の目。違ったところを見ているようですが、それはアプローチの違い、「弱きものをなくしていきたい」といった終着点は同じであったことがわかる展示です。社会的に主義・主張への圧力が強いなか、抜け道を見つけ出し、ときにはその圧力さえも滑稽に描き、楽しんでいるかのようです。今回のご紹介では３人を中心にしましたが、夏目漱石や石川啄木も出てきます。彼らがどのように今回の展示に関係するかは、ぜひ、記念館の展示をご覧ください。

今回の展示では、針文字書簡も展示しています。こちらの資料は実物でないと、なかなか雰囲気が伝わりませんので、今回おたよりで写真を掲載したかったのですが、掲載を我慢しました。

展示に合わせて、「針文字書簡」がどのような経緯で見つかったのか、そのドキドキを追体験していただければと、下記日程で講演会を行います。ぜひ、お越しください。

講演会「大逆事件針文字書簡の発見」
日時　９月26日（日）
　　午後２時～（午後１時30分開場）
場所　生涯学習センターアビスタ　ホール
講師　小林康達さん（元我孫子市史編集委員）
定員　50人
　　（要予約・先着順・９月１日から受付）
参加費　無料
申・問　杉村楚人冠記念館　7187-1131

事務局より

今回のおたよりは文字資料中心のため、色合いが地味で、申し訳ありませんでした(^_^A

緊急事態宣言中も記念館・文学館は通常どおり開館しております。お越しの際は感染症対策をとって、できるだけ少人数でお願いします。

次回の月例会は<u>１０月４日（月）午前９時30分から教育委員会大会議室で開催</u>の予定です。開催が決定しましたら、お知らせいたします。

文化の秋になりますので、旧村川別荘市民ガイド再開に向けて、進んでいきたいと思いますが、まだまだ、心配な状況でもありますので、皆さまのお気持ちとご相談しながら、無理なく再開できたらと思っています。なにかご不明な点、ご不安な点などございましたら、お気軽に事務局までお知らせください。よろしくお願い申し上げます。

あわせて、９月１日からインターネットサイト「さとふる」でクラウドファンディングを募集することになりました。くわしくはチラシを同封しますので、ご協力をお願いします。

クラウドファンディング募集
サイトＱＲコード→

旧村川別荘だより

168号

令和３年１０月２１日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

１０月の月例会について

１０月の月例会については、９月の緊急事態宣言解除をもってご連絡を差し上げたため、急なご連絡になってしまいました。申し訳ありません。

１０月の月例会では、コロナウイルスが発生以来、各地の博物館や資料館でのガイド活動はどのように行われているか、いくつかの訪問先からの体験談をお話ししました。

ガイド再開に向けての事例紹介

〇旧小坂家住宅

【旧小坂家住宅の位置】

二子玉川駅は多摩川近くにある駅で、関東平野にある荒川・多摩川・京浜東北線・入間川に挟まれた面積 700 ㎢ の台地である武蔵野台地の縁にあたります。縁は国分寺崖線と呼ばれ、武蔵村山市から大田区の田園調布あたりまで高さ１０～２０mの斜面が約３０km続きます。等々力渓谷も国分寺崖線の一部です。

崖線沿いは水が豊かで、台地からは富士山と多摩川の壮大な眺めが望めました。崖線に沿ってたくさんの古墳があります。このようにご紹介すると、台地から手賀沼と富士山を眺望できる我孫子市の地形とよく似ていることが想像できると思います。ですから、旧小坂家住宅周辺は我孫子と同じように、週末の余暇を景観の良い場所で過ごすため、家族や政財界人たちの別邸が数多く建てられました。

今回ご紹介する旧小坂家住宅までの道のりは、二子玉川駅から徒歩約２０分。起伏の少ない閑静な住宅街のなかにあります。ただ、旧小坂家住宅にたどり着くには、旧村川別荘のような斜面地を上らなくてはいけません。斜面の上には洋風の寝室、和風の主屋、山小屋風の書斎で構成された２階建ての建物があります。台地の上に多摩川に面して広く窓が備えられていることからも、景観が気に入って建てられた家であることがわかります。

【活用について】

旧小坂家住宅のガイド活動は世田谷トラストまちづくりで行われています。近くにお住まいの方が場所に愛着を持って、ガイドされている雰囲気を感じました。建物の一番奥にある寝室には児童書が並び、近隣の子どもたちが本を読みに遊びに来ていました。建物の中央に位置する和室は、庭に面して広い縁側があり、庭を眺める人影がありました。文化財としての訪問はもちろん、地域の憩いの場としても空間を提供している場所です。

【ガイド活動】

令和２年４月７日～５月２１日まで行われた、第１回目の緊急事態宣言時、旧小坂家住宅住宅は休館となりました。その後、緊急事態宣言が解除されると、通常どおりの開館となりましたが、積極的なガイドは行わない、として、ガイド活動が再開されました。

ガイドに際しては、①基本的には声をかけない、②人と話す際は距離をとるなどの対応をしているそうです。これらの対応によって、安心してガイドができるようですが、「コロナ前に得たガイドの経験を役立てる機会が減ってしまったのが残念」とのことでした。

〇店蔵 絹甚（以下絹甚）

【絹甚の位置】

絹甚の所在地は、飯能駅からほど近い、大通りに面しています。この大通りでは、１７世紀後半に、市が開かれ、炭や石灰、さらには生糸や織物が集まりました。飯能が集荷のための基地となり、各地の消費地へと送られました。一方、正徳・享保期（１７１１年～１７３６年）になると、入

間川を利用して、伐り出した材木を運ぶようになり、林業も発展していきました。こうした川と道での発展は布佐河岸と我孫子宿に通じる所があります。飯能は布佐と我孫子の二つの機能を持っていた場所であることからも、大きな町であったことがわかります。

余談ですが、この飯能は今年の大河ドラマでも舞台になっています。主人公渋沢栄一の見立養子（相続人）の渋沢平九郎の最後の戦となった飯能戦争の舞台でもあります。渋沢平九郎が属する振武軍が本営にした能仁寺が小高い丘の中腹にあります。

【活用について】

絹甚は絹甚運営委員会によって運営されています。委員会により、絹甚でギャラリー活動やイベントが行われています。訪問した当時は、委員会の活動の一つである飯能布塾が作成したつる雛が展示されていました。本来ならば、期間外とのことですが、新型コロナウイルス感染症防止の一環で、展示期間が延長していたようです。

【ガイド活動】

ガイドさんは１人常駐しています。本来ならば、店の奥まで公開していますが、新型コロナウイルス感染防止のため、店先から奥を覗き込んで見学するようになっていました。ガイドさんは基本的には座敷に上がって、店の中からガイドしてくださるので、店先で覗いている来館者とは距離を取ってガイドされていました。

〇富岡製糸場

【富岡製糸場の位置】

富岡製糸場は、上州富岡駅から徒歩で約１５分の位置にあります。駅近くには、ビジターセンターとして、群馬県立世界遺産センター「セカイト」があります。セカイトは富岡製糸場を含む群馬県内の生糸に関する文化財を「ぐんまの絹物語」という一つのテーマに絞って紹介しています。

商店街を進んで富岡製糸場へと向かいます。

【富岡製糸場について】

富岡製糸場は、日本初の本格的な器械製糸工場として、絹産業遺産群と併せて、平成２６年世界遺産に登録された場所です。製糸場の設立にあたっては、またもや大河ドラマ主人公渋沢栄一が関わっており、製糸場の初代場長は渋沢の従兄弟、尾高惇忠でした。まさか年に２回も大河ドラマに関連する土地に縁があるとは思いませんでした！

【ガイド活動】

ガイダンスビデオなどは座席数を減らして上映されていました。

2020年１０月に新しく開館した「西置繭所」は、ガラスケースの大きな部屋の中が展示施設となっています。富岡製糸場に関連する資料が展示され、ガラスをとおして、修復された西置繭所を見ることができます。ここは、来館者が多い場合、入場制限を行うようでした。

製糸場内のガイド活動は、１日６回、定時に行われます。各回の定員は１５人となっています。マスクを必ず着用して、参加することになっています。

〇まとめ

各施設でガイド活動は再開している様子でした。ただ、コロナウイルスが流行する以前と同じようなガイドを行っている施設はありませんでした。声掛けを減らす、来館者との距離を取るなどの工夫が見受けられました。

事務局より

今回のおたよりも、写真が少なくて申し訳ありませんでした。ガイド再開に向けて少しでも安心できる情報提供になれば…と、思っています。

１１月からガイド活動を再開する予定ですが、皆さまのご無理がない範囲でご参加いただければと思います。

次回の月例会は１１月２日（火）午前９時30分から教育委員会大会議室で開催の予定です。

当日は、お話しとともに今後のガイド活動について最終調整をさせていただければと思います。

旧村川別荘だより

169号

令和３年１１月２５日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

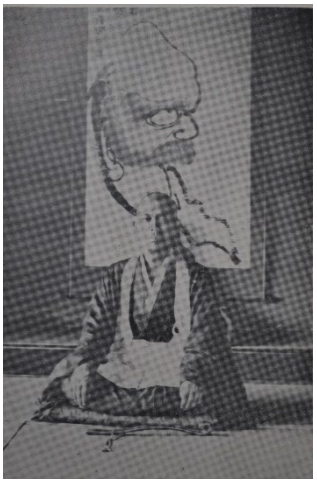
１１月の月例会について

１１月の月例会にでは、杉村楚人冠記念館学芸員の高木さんより１０月１６日から開催されている企画展「「禅」が結んだ人びと　釈宗演と楚人冠の周辺」について、展示解説がありました。

「禅」が結んだ人びと　釈宗演と楚人冠の周辺

〇釈宗演（1860-1919）とは

臨済宗の僧で、円覚寺、建長寺で管長を務めます。万国宗教大会出席を機に、初めて欧米に禅を紹介しました。夏目漱石、徳富蘇峰ら著名人が釈宗演のもとで参禅し、禅ブームをおこしたと言われています。楚人冠に居士号「無懐居士」を授けた人物です。

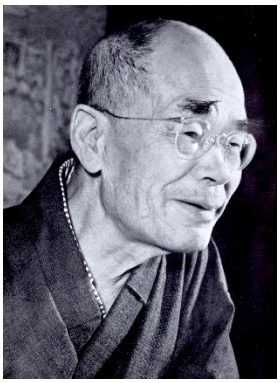

釈宗演

〇釈宗演が結ぶ縁

安政６（1859）年生まれ、１１歳のとき臨済宗妙心寺で出家しますが、出家の理由は分かっていません。

とても優秀な方だったようで、26 歳で鎌倉円覚寺に付属するお寺の住職となります。普通のお坊さんなら、このまま修行を続けますが、英語も勉強するために慶應義塾に入学しました。慶應義塾では、英語の先生として赴任していた宣教師クレイ・マッコーレイとの出会いがあります。当時、英語の教師は宣教師が担うことが多かったようで、仏教を学んだ人物がキリスト教の精神も学ぶことになります。クレイ・マッコーレイは日本ユニテリアン教会の責任者で、自由神学校（のちの先進学院）の責任者でもありました。楚人冠に宗教哲学を教え、常に目をかけ、楚人冠を米国公使館の通訳に推薦した人物です。釈宗演がクレイ・マッコーレイと会ったのは、楚人冠が自由神学校に入る前ですが、交友関係がつながっていることがわかります。

また、この時代、江戸幕府から明治政府に政治が変わったように、世の中の変化は仏教界にも影響を及ぼし、仏教を存続するための変革を迫られました。活動の場所や方法は異なるものの、釈宗演、楚人冠も新たな仏教の形を目指しています。釈宗演は、禅の門戸を出家していない信者（居士）の参禅を積極的に受け入れました。仏教改革を目指す仲間に誘われ、楚人冠が参禅するのもその流れです。そして、円覚寺で鈴木大拙と出会います。鈴木大拙は仏教、特に禅思想を欧米に紹介した人物で、この出会い以降楚人冠が没するまで親交を結びました。


鈴木大拙

余談ですが、この仏教改革を目指した青年グループのなかに高楠順次郎という人物がいました。『反省会雑誌』（のち『中央公論』）を刊行した反省会の仲間です。高楠は、のちに仏教学者となり、一方で日本橋簡易商業夜学校（⇒中央商業学校）を興します。これは現在の中央学院大学です。高楠が作った学校が我孫子に来るとは、この数奇な縁は楚人冠達も想像できなかったと思います。

釈宗演の人生を追うだけでも、楚人冠の人生にも影響を与えた人物が名を連ねていることがわかります。今回の展示では、楚人冠邸に眠る資料を紐解いて、禅、釈宗演、楚人冠を繋ぐ交友関係と数奇な運命を見ていきます。

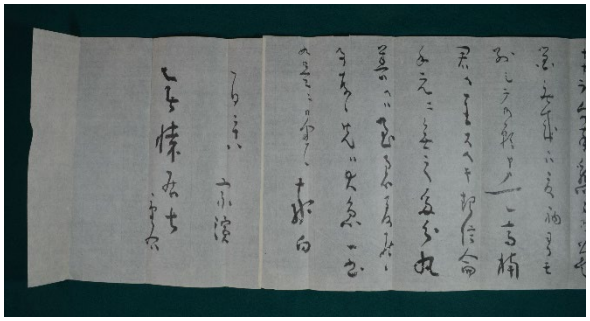
〇夏目漱石『門』

小説家の夏目漱石は、東京帝国大学（現：東京大学）で教鞭を執っていた頃から「吾輩は猫である」「坊っちゃん」などを発表して文名を高め、

東京朝日新聞社に入社して以後、数々の小説を朝日新聞紙上に連載しました。入社以来、楚人冠とは漱石が出社するたびに昼食を共にする仲でした。東京朝日新聞で明治 43（1910）年３月１日から連載が開始された「門」という小説の中で、主人公宗助の参禅の場面には、明治 27（1894）年に漱石が参禅した経験が反映されています。そして、楚人冠も『へちまのかは』（『楚人冠全集』第一巻）の「雲水行住」で座禅の様子を描いています。楚人冠の「雲水行住」は、明治 42 年９月の作品です。読み比べると、小説家と随筆家で書き方の立ち位置、物事の受け取り方が違い、同一人物に参禅したのに、ずいぶんと印象が違います。一人はシリアスに、一人はコミカルに描いています。漱石の参禅は明治 27（1894 ）年 12 月、楚人冠の参禅楚人冠の参禅は翌 28 年 ６月、円覚寺では半年差で出会わなかった二人ですが、親しくなってから禅について会話を交わすこともあったかもしれません。

〇釈宗演から楚人冠への手紙

明治 31（1898）年釈宗演から楚人冠に手紙が来て、友人として土屋元作を紹介してくれました。土屋も釈宗演のもとに参禅した一人です。こうして釈宗演が土屋と楚人冠を結び付けたことが、のちに思わぬ成果を生みます。



それは、大きな反響を呼んだ参加者公募の世界一周旅行「朝日世界一周会」です。この旅行を計画し引率したのは楚人冠と土屋の二人でした。

世界一周会の実現につながる土屋との縁は、1893 年にさかのぼります。この年、釈宗演は彼のもとに参禅していた野村洋三という人物を通訳として伴い、1893 年にシカゴで開催された万国宗教会議に参加しました。当時の万博では各国の産物の売り込みが行われます。そこに商工業者として参加しており、宗演・野村と偶然再会したのが土屋でした。こういった渡米経験を持つ土屋が参加者公募のヨーロッパ旅行を計画していた楚人冠に、それならアメリカも、と提案してでき上ったのが、世界一周会の企画だったのです。

世界一周会の参加者
後列左端　土屋　右から二人目　楚人冠

この出会いが世界一周会につながるもう一つのエピソードが、「ただ一人夫の同伴なく参加した女性」です。この女性は野村みちという、横浜で外国人向けの骨とう品店を営んでいた人物です。野村みちは、実はシカゴで宗演とともに土屋と旧交を温めた野村洋三の妻です。世界一周会の参加者にも、禅が結んだ縁が生きていたのです。ちなみに、野村夫妻は関東大震災で骨とう品店を閉めた後は、横浜の震災復興に貢献し、ホテルニューグランドの経営を長く行いました。

禅という経験が、人やその後の人生を広げ豊かにしていることがわかる展示となっています。その他の「縁」は杉村楚人冠記念館でご覧ください！

事務局より

11 月３日よりガイド活動が再開しました。ご都合をつけていただき、ありがとうございます。

再開して、皆さまから色々アドバイスをいただいていますので、少しずつ改善していければと思っています。よろしくお願い申し上げます。

再開とともに散策の秋になっています。11 月 17 日～21 日まで JR のイベント駅からハイキングも行われ、ご来館数が多かったようです。

次回の月例会は１２月２日（木）午前９時 30 分から教育委員会大会議室で開催の予定です。

旧村川別荘だより

170号

令和３年１２月２２日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

１２月の月例会について

１２月の月例会にでは、白樺文学館学芸員の稲村さんより１１月１７日から開催されている企画展「山田百合子と原田京平―我孫子への物語」について、展示解説がありました。

「山田百合子と原田京平―我孫子への物語」

〇山田百合子（1899 年～1995 年）とは

山田百合子

歌人。海軍軍医実吉安純の長女。結婚し、夫の転勤先のニューヨークから帰国後、短歌を本格的にはじめます。その時の様子は、百合子が書いた『マイ ハッピー オールド デイズ』のなかにある「短歌とわたし」で紹介されています。そこからわかるのは、

①短歌の師である宇津野研との接点は、百合子の兄と同じ時に医師を志し、一緒に勉強していた

②子供たちの主治医であった

ということです。

宇津野研は小児科医で、短歌を佐佐木信綱、のちに窪田空穂に師事した人物です。百合子は、主治医・宇津野と会うなかで、宇津野から歌誌『白檮（しらがし）』が送られたのをきっかけに短歌に触れ、『白檮』に出詠し、『白檮』廃刊に際して『勁草』が創刊したため、宇津野から『勁草』の同人となるよう勧められました。

〇雑誌『白檮』とは

雑誌『白樺』が関東大震災によって廃刊したように、関東大震災後、印刷状況の悪化により、各方面の雑誌で廃刊・統合の危機がありました。短歌の雑誌『国民文学』（大正３（1914）年窪田空穂らが創刊）、『地上』（大正９（1920）年対馬完治らが創刊）『朝の光』（大正９年宇津野研、氏家信が創刊）も例外ではありませんでした。大正 12（1923）年の関東大震災の影響により３つの雑誌が合同で『国歌』を大正 13 年に出版します。しかし、翌年には『国民文学』のグループが離脱し、『地上』『朝の光』の２つの雑誌を出版していたグループが『白檮』を作りました。『白檮』は大正 14（1925）年～昭和４（1929）年まで続きました（通巻 42 号）。

一方、百合子は大正 14 年にニューヨークから帰国し、『白檮』に入会しました。彼女の記録を見ると、旧号を５部、宇津野から譲ってもらい、以降少なくても 2 年間は購読していたことがわかるため、半分以上の『白檮』を読んでいたと思われます。百合子の資料として残っている『白檮』は、全 42 冊中の 27 冊。それも、合本（複数冊が 1 冊にまとめられている状態）として残っていました。

〇原田京平（1895 年～1936 年）とは

我孫子に住んでいたころの原田一家

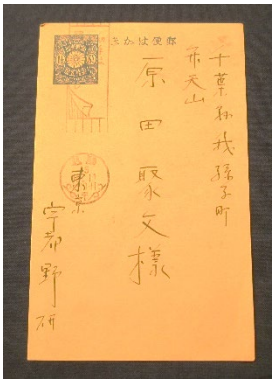
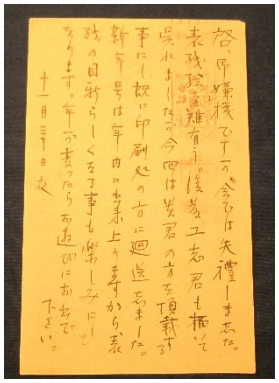
画家、歌人。志賀直哉が我孫子を去った後、志賀の家に住み、画家として活動。短歌は窪田空穂、絵は山本鼎に師事。

〇原田京平と『白檮』

原田と『白檮』の接点となる書簡が原田京平資料にあります。まず１通目は、大正 15 年 11 月 30 日付宇津野研から原田宛に出された表紙絵の礼状で、内容を見ると表紙絵は新年号を飾ることがわかります。そして２通目は翌年昭和２（1927）年１月 5 付宇津野からの書簡で、表紙絵の評判について綴ってあることから、無事に原田の絵が表紙として出版されたとこがわかります。

二人の短歌の師は窪田空穂であり、書簡のなかで「会では失礼いたしました」とあることから、

表紙絵を依頼するにあたり、すでに知り合いであったことが窺えます。ただ、この書簡の文面を見るだけでは「表紙絵」が『白檮』であったことはわかりません。

大正 15 年 11 月 30 日付宇津野研書簡

〇表紙絵の謎を解く

平成27(2015)年原田京平資料が寄託され、調査を行ったところ、鳥 2 羽が水墨画で描かれた下絵が確認できました。しかし、資料を整理したときはそれ以上の情報を得ることができませんでした。

原田京平水彩画［『白檮』下絵］

時を経て、令和２（2020）年に山田家から志賀直哉及び山田家関係資料資料の寄贈を受けました。そのなかに山田百合子が出詠していた『白檮』が含まれていたのです。

先ほど記したように『白檮』は合本し、保存されていましたが、奇跡的に原田京平資料で整理された鳥の水墨画の表紙となっている『白檮』は唯一合本されず保存されていたことから、表紙絵と水墨画の下絵を並べて確認することができました。表紙絵の原本は、宇津野に送り印刷所へ回送されたことが大正 15 年 11 月 30 日の書簡からもわかります。

〇『白檮』が発見された意義

『白檮』表紙

もともと交わることがなかった原田家と山田家の資料ですが、原田と百合子の共通のライフワークであった「短歌」が 2 つの家を繋ぐこととなりました。その証として『白檮』が重要なものでした。原田京平資料群だけでは、『白檮』の存在自体は不明でしたが、山田家の資料にあった『白檮』を見ることで、原田京平資料にあった水墨画の下絵と宇津野研からの手紙の内容を補完することができたのです。まったく出どころが異なる資料が繋ぎあうのは、とても稀なことです。

前号は「禅が結ぶ縁」について、ご紹介しましたが、今回は「『白檮』が結ぶ縁」をご紹介できたかと思います。

文学館では、希少な『白檮』と、原田の直筆の絵を鑑賞していただけます。ぜひ、創作の過程をご覧いただければと思います。展示は令和 4 年２月27 日（日）まで開催しています。

事務局より

本年もありがとうございました。昨年の 3 月から長きにわたってガイド活動が休止していましたが、令和 3 年中に再開することができました。ありがとうございます。いまのところ、新型コロナウイルスの感染拡大も落ち着いていますので、このままガイド活動を続けていきたいと思います。状況を見ながらできれば 3 月に研修会の開催も検討していますので、決まり次第、ご報告いたします。

また、志賀直哉邸跡書斎のクラウドファンディングですが、皆さまのおかげをもちまして、目標金額を達成することができました！ありがとうございました。達成はしましたが、今後の修復に向けて、１月５日（水）まで募集を続けていますので、ぜひ、ご参加ください。

次回の月例会は令和４年１月１１日（火）午前９時 30 分から教育委員会大会議室で開催の予定です。年末年始、お身体にお気を付けてお過ごしください。

旧村川別荘だより

171号

令和４年１月21日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子1684番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

１月の月例会について

１月の月例会にでは、文化・スポーツ課今野より２月２２日（火）正午から開催する寄贈資料展示会の解説がありました。

寄贈資料展示会
「眠っていた歴史を起こしてみよう！」

〇概要

会期　令和４年２月２２日（火）から３月７日（月）まで（２月28日休館）

会場　アビスタ　２階　展示室

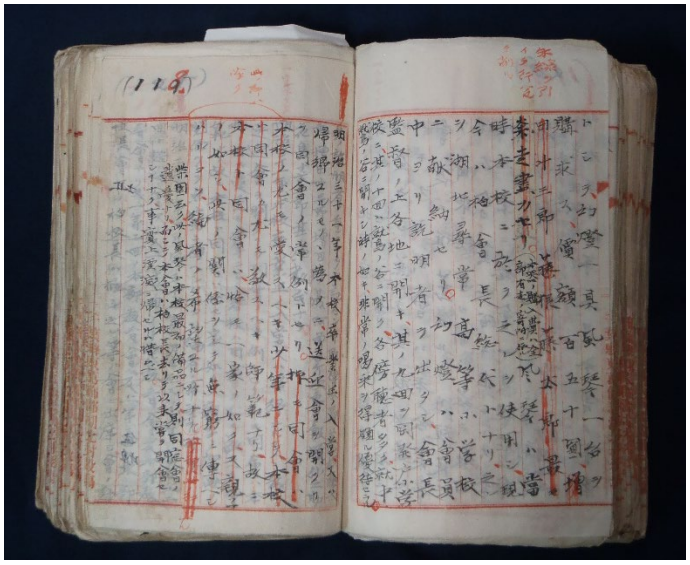
湖北地区に関する資料を寄贈される機会が多かったので、その資料を公開します。

〇『湖北村誌』原稿

この資料は、『湖北村誌』を出版するにあたって作成された原本です。全て手書きで書かれており、欄外には中野治房による注意書きや印刷する際に出版社に出した指示などが書かれています。

出版された本では削除された文書などがわかることから、どのように本が成り立っていったのか知ることができます。

また、文章は格式高く、かなり漢文に長けた人物によって書かれたことがわかります。



〇『湖北村誌』とは

大正４（1915 年）、大正天皇の即位（御大典）の記念事業として、東葛飾郡（現千葉県）は『東葛飾郡誌』を編纂するために、郡の町村にその地域の誌を編纂することを依頼しました。そのときにまとめたものを『湖北村誌』をとして、大正９年、湖北村役場が発行しました。村誌の内容は、当時の村の概要や歴史を記しているので、歴史資料としても価値のあるものです。また、我孫子市域内で刊行物として大正時代に村の歴史をまとめたのは『湖北村誌』のみであることからも貴重な資料といえます。（『布佐町誌』は私家版の町誌として残っています）

〇『湖北村誌』を編んだ人々

【菅井敬之助】（1855 年～1937 年）

中峠村、漢方医の家に生まれる。江戸で漢学や漢方を学びました。明治 18（1885）年父が没すると家業の漢方医を継ぐために故郷に戻りました。我孫子では、村医、学校医であるとともに、村会議員も務めました。

『湖北村誌』の著者です。編纂を大正６年に湖北村長から委託され、大正８年に完成しました。『湖北村誌』の原稿を見ると、「湖北村役場」の原稿用紙が使われており、このことからも公的な事業であったことがわかります。

【中野治房】（1883 年～1973 年）

中里村に生まれる。湖北尋常小学校を卒業し、東京帝国大学（現東京大学）理科大学植物学科に入学、手賀沼の水生植物を初めて調査しました。その後、水産講習所（現東京海洋大学）、東京大学、東邦大学などで教鞭を執りました。

植物学者として研究・教育に携わるとともに『湖北村誌』の校閲、湖北村長、湖北文化連盟の会長など、地域のために様々な役割を担った人物です。

○山岡鉄舟の書

『湖北村誌』の復刻版では『『湖北村誌』をめぐって一編さん関係者の人物像と戦後の顕彰ー』が付録としてあります。そのなかにある「菅井敬之助論」で山岡鉄舟より菅井敬之助に贈られた書という写真が掲載されています。その書が近年我孫子市に寄贈されました。

山岡鉄舟は江戸に住んでいた人なので、菅井敬之助が江戸で学んでいた時代に交流があり、書が贈られたと考えられます。書の左側には「為菅井氏（すがいしのため）」と書かれており、二人の交流が窺えます。

【山岡鉄舟】（1836 年～1888 年）

江戸に生まれる。幕臣として徳川慶喜から直々に使者として官軍の駐留する駿府（現静岡）に行くよう命じられ、単身で西郷隆盛と交渉し、江戸無血開城の立役者となりました。

維新後、明治政府では静岡藩権大参事（現副知事相当職）、茨城県参事（現知事相当職）、侍従、宮内庁少輔（卿：大臣相当職→大輔→少輔）などを歴任しました。勝海舟、高橋泥舟（旗本、槍の使い手）とともに「幕末の三舟」と称されています。

○『増田實日記』とは

増田實が書いた大正５（1916）年、17 歳～昭和 34（1959）年、60 歳までの日記です。途中、２回、17 年間にわたっての空白がありますが、農家を家業とした一個人の日記が世に出ることは珍しく、当時の農村や民衆の生活の様子、農家経営の変化、社会状況などがまとまったかたちで克明に記されています。

【増田實】（1899 年～1960 年）

印旛郡大森町（現印西市）の武藤家に生まれる。大正９（1920）年に湖北村の増田家に婿養子として縁組します。昭和 3 年に分家し独立した増田實は布佐の井上二郎が主導した相島耕地開墾事業に参加したり、成田線を利用した行商を行ったりしました。これら我孫子市の歴史を語るうえで大切な事象を日記に記しました。

日記から増田実の向学心が強い様子がわかります。また、中峠地区の青年館の資料を見ると雑誌『白樺』などが所蔵されていることから、湖北地区に住む青年たちが学問や文化を愛する様子を窺えます。

以上の資料を中心に寄贈資料を紹介する展示を行います。ぜひ、お越しください。

事務局より

２月２日（水）～20 日（日）までアビスタ２階展示室で千葉県北西部地区文化財速報展「足元に眠る歴史」を行います。千葉県北西部地区文化財担当者連絡協議会（我孫子市、市川市、浦安市、柏市、鎌ケ谷市、流山市、習志野市、野田市、船橋市、松戸市、八千代市以上、11 市）が主催する展示です。我孫子市からは昨年、江戸東京博物館他で開催された「発掘された日本列島」展に出展した下ヶ戸貝塚のミミズク土偶が展示されます。我孫子市近隣市で発掘された考古資料も一挙に展示しますので、こちらも、ぜひ、ご覧ください！

今回のおたよりに研修会のご案内を同封しました。３月に佐原を訪問する予定です。佐原のガイドさんに街並みなどをご案内していただいた後、山車会館、香取神宮に行く予定です。香取神宮に関しては、たっぷり見学すると２時間 30 分かかるとのことでしたので、１時間くらいで見学できる範囲を散策する予定です。５月にも研修会を行う予定ですので（富岡製糸場を予定しています）、無理なくご参加ください。

志賀直哉邸跡書斎のクラウドファンディングですが、皆さまのおかげをもちまして、無事終了しました！ありがとうございました。１月 17 日現在で 1,288,000 円、186 人の方にご賛同いただきました。

新型コロナウイルス感染状況により、**旧村川別荘現地でのガイド活動を２月 13 日（日）まで休止します**。別荘は通常どおり開館しています。

次回の月例会は令和４年２月２日（水）午前９時 30 分から教育委員会大会議室で開催の予定です。

旧村川別荘だより

172号

令和４年２月２１日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

２月の月例会について

２月の月例会にでは、杉村楚人冠記念館の高木さんより１月１８日（火）から開催しているテーマ展「てがみ展　楚人冠の随筆に登場する人々」の解説がありました。

テーマ展
「てがみ展　楚人冠の随筆に登場する人々」

〇概要

会期　令和４年３月１３日（日）まで

杉村楚人冠邸に残された資料のなかには、一点一点資料として歴史的な価値が高いものの、一つの企画展をつくるには少し物足りない資料があります。そこで、記念館では企画展を挟む短い期間については、「テーマ展」と称してそうした資料をじっくり紹介する展示を行っています。今回は、いずれも楚人冠の随筆に登場する人物を紹介します。

彼らとの書簡をとおしての交友関係を見るほかに、楚人冠の随筆を読むことで、楚人冠の視点から見た交流がどのようなものであったか、うかがうことができます。手紙と随筆を同時に読み解くことができるのは、楚人冠資料ならではだと思います。

○　結城素明

日本画家結城素明と楚人冠はお互いに若かった頃の新仏教運動以来の付き合いでした。今回の展示では床の間に楚人冠の肖像画がかかっていますが、これは結城の筆によるもので、細かな筆さばきで写実的に描かれています。なお、今回は展示されていませんが、楚人冠記念館の一筆箋の図案に使った楚人冠の絵も結城が書いたものです。こちらは、足が長い楚人冠の体形をデフォルメした作品となっています。

今回展示した手紙は、結城が楚人冠の肖像画の作成について書いたものです。そして、楚人冠の書いた随筆からは画家らしく写生に熱心な結城の様子が見てとれます。

○　三島海雲

三島はカルピス１００周年の年に楚人冠記念館の企画展でも取り上げた、カルピスの創業者にして西本願寺文学寮（現・龍谷大学）での楚人冠の教え子です。三島は生涯楚人冠を師と仰いでいました。

今回展示している手紙は、前の企画展ではご紹介できなかったものです。このテーマ展のよいところは、企画展で紹介しきれなかったエピソードもご紹介できるところですね。一通は、『アサヒグラフ』の随筆で三島を題材にした作品が発表されたことへの礼状です。その随筆は三島の別荘に楚人冠が招待された時のもの。別荘近辺での三島の乗馬姿の彩色写真を使った絵葉書もあるので、これもあわせて展示しています。彩色写真とは、白黒写真に絵の具で色を付けたものです。

○　近江一郎と星一

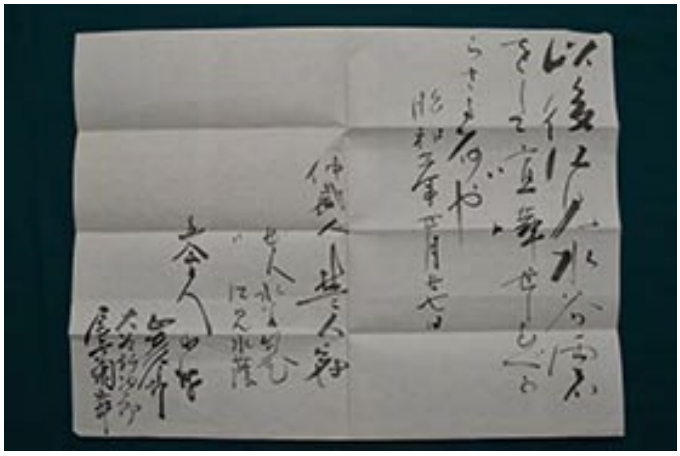
今回紹介している人物で、唯一詳細な経歴がわからないのが近江一郎という人物です。それで

も今回の展示に入れたのは、アビスタにも使われている楚人冠が手賀沼でヨットに乗っている写真、そのヨットの船体を楚人冠にくれたのが近江だからです。バルサという軽量の木を使った船だったそうです。近江からバルサのことを聞いた楚人冠が、冗談半分にこれで一儲けしないか、と声をかけた実業家が星製薬の星一。星は製薬事業のため台湾やペルーに山を持っていたので、楚人冠は星にバルサの話をしたのです。

植民地や海外にも土地を持って事業を展開する星は政治家とも距離が近かったのですが、そのために政争に巻き込まれ、星製薬の経営は傾いていきます。その様子を描いたのが星新一の『人民は弱し 官吏は強し』。そう、SF 小説家の星新一は星一の息子です。新一は父の持つ『楚人冠全集』を愛読したそうですから、得意のショートショートのスタイルには、楚人冠の随筆の影響もあるはずなのです。

○　江見水蔭と巌谷小波

今回の展示資料で一番の「珍品」は間違いなく「喧嘩仲裁状」です。小説家の江見水蔭と演劇評論家の水谷幻花が喧嘩をして口もきかない、というのを、楚人冠が仲立ちし、児童文学者の巌谷小波にも協力してもらって仲直りさせた、という一件の証拠書類です。江見が喧嘩の仲裁を頼むてがみや礼状には、素直な気持ちが書かれています。



「以後江見水谷両君をして喧嘩せしむべからざる者也」。これにて一件落着。

○　長谷川如是閑

大阪朝日の如是閑と東京朝日の楚人冠という関係にあった二人ですが、言論弾圧事件白虹事件で如是閑が退社し上京してからは、プライベートの付き合いもありました。今回の展示では、楚人冠が落馬骨折したことを描いた作品「落馬記」を読んだ如是閑が贈ってくれた短歌の葉書を紹介しています。

「下総の吾孫子の翁は聖さびず我落ちにきと人に語るか」

○　坪谷水哉

現在の東京都立図書館の創設に功のあった人で、博文館の創業家が設けた私立大橋図書館の館長を務めていました。坪谷の葉書で注目していただきたいのは、戦時中稲毛に疎開していること。現在の総武快速線の駅で言うと、西の津田沼も東の千葉も軍都、稲毛だけが別荘地でもあった空襲の危険の少ない場所なのです。戦後の埋め立てで海こそ見えなくなりましたが、稲毛の浅間神社から現在は千葉市民ギャラリーになっている旧神谷伝兵衛別荘の付近にはその面影が残っています。何気ない一枚の葉書ですが、ちゃんと千葉県の歴史を伝えています。

事務局より

２月２３日（水）～３月７日（月）までアビスタ２階展示室にて、先月月例会でお話しした寄贈資料展を行います。湖北地区に関する資料や、旧井上家資料も展示します。初めて展示する資料も多数ありますので、ぜひ、ご覧ください！また、３月１日（火）から文化・スポーツ課の新人職員が作成した「我孫子遺産」の紹介パンフレットもアビスタで配布します！

現在、まん延防止等重点措置のため、３月６日（日）まで、旧村川別荘新館でのガイド活動を中止しています（別荘は通常どおり開館しています）。月例会は通常どおり行いますので、よろしければご参加ください。

佐原への研修会については、ご案内していましたが、今回は中止となりました。楽しみにしていただいていたのに申し訳ありません。５月２６日（木）に研修会を開催する予定です。今度は開催したいものです。また近くなりましたらご案内いたしますので、よろしくお願いします。

次回の月例会は３月１日（火）教育委員会大会議室で午前９時３０分から行います。

旧村川別荘だより

173号

令和４年３月２２日発行
旧村川別荘市民ガイド事務局
我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課
歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
〒270-1166
我孫子市我孫子 1684 番地
TEL:04-7185-1583（直通）
E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

３月の月例会について

３月の月例会にでは、白樺文学館の稲村さんより３月１日（火）から９月25日（日）開催している常設テーマ「民藝運動と我孫子」の展示解説がありました。

常設テーマ展「民藝運動と我孫子」

〇概要

会期　令和４年９月２５日（日）まで

白樺文学館では、特別展と常設テーマ展を交互に展示しています。今回の展示は常設テーマの「民藝運動と我孫子」になります。もともと白樺文学館で持っていたコレクションと山田家コレクション（山田家は志賀直哉の娘の嫁ぎ先）のなかから、民藝に関する資料を中心に展示しています。

〇白樺文学館コレクションから

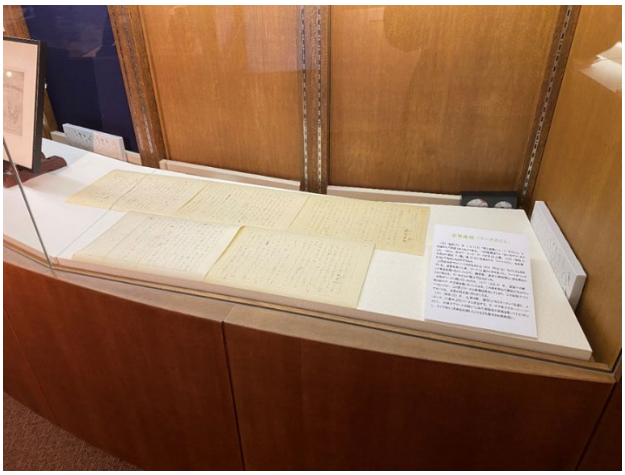
バーナード・リーチは柳の住まいであった三樹荘に窯をつくり、陶芸活動をしていました。彼が我孫子で作った作品は日本民藝館などで所蔵されています。

バーナード・リーチは我孫子を離れた後、イギリスに戻り、リーチ・ポタリーをひらき、イギリスで活動しながら、何度も来日し、東洋と西洋の文化の懸け橋となりました。

展示している作品は、我孫子でリーチが作った作品ではありませんが、リーチの代表的なデザインのものです。

バーナード・リーチは陶芸家というだけではなく、白樺派の人々と交流し、本のデザインもかかわっています。今回は志賀直哉の本の表紙絵を展示しています。

またバーナード・リーチと志賀直哉、二人の関係がうかがえる資料として、志賀直哉の原稿「リーチのこと」です。原稿では志賀がリーチと親しくなったのは、1917（大正６）年、我孫子の柳宅の庭にリーチが窯を築いたことによるものであり、この窯を尋ねて濱田庄司がやってくるのだが、この翌日リーチの窯場は焼失してしまう様子が描かれています。

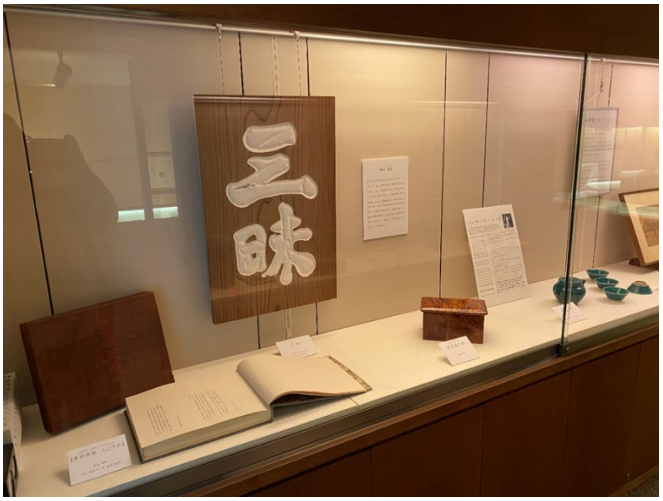


あわせて、焼けてしまったリーチの作業場のジオラマも置いてあります。リーチが設計した作業場から、西洋から見た東洋の美を発見できるかもしれません。

そのほかにもリーチと縁が深く、リーチがイギリスでポタリーを作る際、協力した濱田庄司の作品、民藝運動に参加した棟方志功、富本憲吉、河井寛次郎などの作品を展示しています。

今回稲村さんが一押しなのは黒田辰秋の作品です。彼は主に漆芸、木工を専門に民藝活動を行っていました。そのため、日本民藝館の展示ケースも彼の作品が使われています。展示品を収蔵するケースが民藝作品という、日本民藝館ならではのスケールに驚きます。

彼の作品は、志賀直哉たち白樺派はもちろん、川端康成や映画監督の黒澤明や多くの著名人に愛されています。



〇山田家コレクションから

山田家コレクションには、リーチが描いた絵と、陶芸作品が出品されています。残念ながら我孫子を描いた作品ではありませんが、リーチが見た日本の風景が描かれています。

事務局より

3月２２日（火）から**まん延防止等重点措置が解除されるのため、3月２２日（火）から、旧村川別荘新館でのガイド活動を再開します！**

月例会も予定どおり行いますので、よろしければご参加ください。

今回のおたよりに5月２６日（木）に研修会の参加票を同封いたしました。次の月例会もしくは４月８日（金）までに事務局にお知らせください。

次回の月例会は4月6日（水）教育委員会大会議室で午前９時３０分から行います。

よろしくお願い申し上げます。